

年12月 9頁

「世界の視点をめぐる思想史的研究」の 活動報告

研究代表者 栗 原 隆

プロジェクトの趣旨

『知のトポス』（新潟大学人文学部哲学・人間学研究会 刊）を刊行することを通して、思想史に埋もれた重要文献を発掘して、邦訳・紹介に努めている。

2010年度の成果

『世界の視点 知のトポス』第6号を例年より早い時期に、すなわち本学で「日本カント協会」研究大会が11月に、「日本ヘーゲル学会」研究大会が12月に開催されたのに合わせて、11月に刊行した。

『世界の視点 知のトポス』第6号（2010年11月）

イマヌエル・カント

観念論をめぐって——一七八〇年代の遺稿から（R5642, 5653-5655）

城戸 淳 訳

F・H・ヤコービ

信念をめぐるデヴィッド・ヒュームもしく観念論と実在論

栗原 隆・阿部 ふく子・福島 健太 訳

G・W・F・ヘーゲル

アルプス徒歩旅行についての報告

加藤 尚武・田中 純夫・阿部 ふく子 訳

ニール・ハーツ

ロンギノス読解

宮崎 裕助・星野 太 訳

参加メンバー

栗原 隆

井山 弘幸

城戸 淳

宮崎 裕助

青柳 かおる

研究会

2010年8月20日（金）13時30分～17時30分に、科研費の共同研究と共催で、公開研究会を開催。

新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」（025-248-8141）

田中 純夫（新潟市社会福祉協議会専務理事）「ハイデガー哲学の可能性」

栗原 隆「信念と懐疑——ヤコービによるヒューム移入とドイツ観念論の発生」⁽¹⁾

納富 信留（慶應義塾大学文学部教授）「アリストテレスにおける感覚と共通感覚」

細田 あや子（新潟大学人文学部准教授）「自著紹介——よきサマリア人の表象」

堀江 珠喜（大阪府立大学教授）「喜悅と官能——バプテスマのヨハネと聖セバスチアンの表象」

11月15日（月）に「ヘーゲル・アーベント」と共催で研究会を開催。

17時30分～19時30分、総合教育研究棟・F棟5階「人間学P S」にて

栗原 隆「微笑と感応——ルネサンス期における微笑みの誕生と主観性の

原理」⁽²⁾

鈴木 光太郎「共感について」

12月25日（土）、「ときめいと」において、新潟大学人文学部哲学・人間学研究会（会長・城戸淳）と、日本ヘーゲル学会との共催で研究大会を開催。本プロジェクトからの発表は以下の通り。

栗原 隆「実在と表象（Dasein und Vorstellung）——ヒュームに向き合う初期ドイツ観念論」

城戸 淳「啓蒙思潮とドイツ観念論期の学問論」

《註》

- (1) 東北大学哲学研究会刊『思索』四三号に収められた論考、「信念と懐疑——ヤコービによるヒュームへの論及とドイツ観念論の成立」として結実、そののち、栗原隆『ドイツ観念論からヘーゲルへ』（未来社、2011年3月）の第一章となった。
- (2) 栗原隆（編）『感応と共感——人間学の新たな地平』（東北大学出版会、2011年4月）に収められた論考、「微笑と感応——ルネサンス期における微笑みの誕生と主観性の原理」へと結実した。

著書・論文

栗原 隆

（単著）論文「意識の事実と観念論の基礎付け」（『フィヒテ研究』18号、23～38頁、2010年）

（単著）論文「信念と懐疑——ヤコービによるヒュームへの論及とドイツ観念論の成立」（東北大学哲学研究会刊『思索』43号、31～50頁、2010年）

（共著・著書）久保陽一（編）『ヘーゲル体系の見直し』（理想社、2010年6月）全272頁

うち、「表象もしくは象が支える世界と哲学体系——知的世界を構築する神話としての〈基礎付け〉と自己知の体系——」（41頁～61頁）を単独で執筆。

（単著・著書）栗原隆『現代を生きてゆくための倫理学』（ナカニシヤ出版、2010

年11月)全302頁

(単著・著書)栗原隆『ドイツ観念論からヘーゲルへ』(未来社, 2011年3月)
全281+vii頁

(編著・著書)Takashi KURIHARA 《Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte》
《(NUSS, 2011年3月)全171頁

うち, Geist und Welt — Der transzendente Idealismus als die eine
Geschichtliche Welt erbauende Mythologie (p.81-101)を単独で執筆。

(編著・著書)栗原隆(編)『共感と感応——人間学の新たな地平——』(東北
大学出版会, 2011年4月)全381頁

うち, 「微笑と感応——ルネサンス期における微笑みの誕生と主観性の原
理」(107~133頁)を単独で執筆するとともに, 「まえがき」(i~vi頁)お
よび「あとがき」(377~381頁)も執筆, 全体を編集した。

城戸 淳

(単著)論文「カントにおける幸福のパラドクス——幸福主義批判と最高善と
のあいだ」(日本カント協会『日本カント研究 ⑪ カントと幸福論』理想社,
2010年, 7~23頁)

(共著・著書)栗原隆(編)『共感と感応——人間学の新たな地平——』(東北
大学出版会, 2011年4月)全381頁

うち, 「想像力と共通感覚——カント哲学のコンテクスト」(59~75頁)を
単独で執筆。

青柳 かおる

(単著)論文「イスラームの婚姻論比較研究——ガザーリー, イブン・アラビー,
カラダーウィー」(『東洋学術研究』49の2, 105~121頁, 2010年)

(単著)論文「イスラームの生命倫理における胚の形成過程の問題」(『比較宗教
思想研究』11号, 1~16頁, 2011年)

Kaoru AOYAGI)

(単著)論文 A Comparative Study of Marriage in Islamic Thought: Al-Ghazali and al-

Qaradawi . : in. 》Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte 《 p.29-52

宮崎 裕助

Yusuke MIYAZAKI

(単著) 論文 Responsibility of Making Decisions without Decisionism : from Carl Schmitt to Jacques Derrida . : in. 》Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte 《 p.140-155

〈声〉とテキスト論

研究代表者 高 木 裕

1. プロジェクト概略

身体的な〈声〉の持っている影響力・役割機能を根本から問い直す試みが、現在、さまざまな研究分野においてなされている。ディスクール理論とナラトロジー、発話行為論、テキスト生成論、演劇論、映像論、メディア論、司法論など、〈声〉にアプローチする角度は多岐にわたる。ところで、そこには「言表」「主体」「身体」というタームが分かちがたく絡み合っており、理論的なアプローチによって絡めとることのできない問題が多い。それを丹念に拾い集め、追究し、むしろそれらの問題の所在をあまねく照らし出すことが重要であり、そこに本研究プロジェクトの特色がある。

本プロジェクトは、日本古典文学、ロシア文学、フランス文学、イギリス文学、アメリカ文学、演劇論、映像論とそれぞれ専門分野を異にする研究者からなり、「声とテキスト論」という共通のテーマの下、〈声〉の視点から、さまざまな研究分野の問題を考究し、相互に比較・検討した上で、この視点からのアプローチの有効性を検証し、新たに、総合的かつ多面的なテキスト論の構築を